

令和5年度 ICT活用実践研究 実績報告書

所属校園	附属函館中学校		形態	<input type="checkbox"/> 個人 <input checked="" type="checkbox"/> 団体・グループ
研究代表者 (申請者)	氏名		職名	備考(分担等)
	金子 智和		教諭	
研究分担者 (団体・グループの場合)	黒田 諭		副校長	
	山下 尚也		教諭	
阿部 奈央美		教諭		
山口 輝晃		教諭		
坂見 明		教諭		
研究題目	1人1台端末環境における指導と評価の一体化の実現 —学習履歴の利活用による学び改善—			
経費支出内訳 (事務の確認を経て提出のこと)				
事項	単価 [円]	員数	金額 [円] (消費税込)	備考 (内訳・特記事項等)
【消耗品費】				
HDMI ケーブル	3,150	5	15,750	10m
ワイヤレスキーボード& マウスセット	3,920	5	19,600	
Google Chromecast	8,200	2	16,400	第三世代 2K対応
合計			51,750	予算額49,000—支出額=2,750円は 附属学校運営費で補填

【研究実績の概要、得られた成果・効果等】 ←以下に自由記載(報告書全体で4ページ程度に)

1 研究実績の概要

1-1 研究主題の設定

令和4年度研究成果では、CBTの利活用により蓄積された学習履歴を教師が指導改善へとつなげ、生徒の実態に合わせた指導計画へと変容させながら指導を行うことができた。一方、こういった学習履歴を生徒が利活用する場面を設定した取組は少なかった。そこで、1人1台端末環境において、「学習履歴」をさらなる利活用が必要だと感じ、以下のような仮説をもとに副主題を設定した。

< 仮説 >

1人1台端末環境において、「学習履歴」を利活用することで、教師が「指導改善」を行うだけでなく、生徒が意図的に「学習改善」できる取組を行い、知識・技能の習得、思考・判断・表現を身に付けるとともに、主体的に学習に取り組む態度(粘り強い取組を行おうとする側面、自ら学習を調整しようとする側面)を育成することができ、これにより指導と評価の一体化の実現できるのではないか。

<研究副主題> 学習履歴の利活用による学びの改善

昨年度は、CBT に重点を置いた成果報告となっていた。今年度は、1人1台端末の環境の利点をさらに活用すべく、その幅を広げ様々な端末活用の場面で「学習履歴」を蓄積し、それらを用いた学びの改善について研究することで、本研究主題を達成できると考えた。特に、学習改善に着目した研究を進めた。

1-2 学習履歴とは

- ①学習履歴は教育データの一部である。
- ②学習履歴は生徒の学びの変容を記録したものである。
- ③学習履歴には「定量的データ（テストの点数等）」と「定性的データ（成果物、主体的に学習に取り組む態度、教師の見取り等）」も含まれる。
- ④学習履歴を教育や学習の改善のために利活用するという視点が大切である。

学校生活の中で、上記の「④ 学習履歴を教育や学習の改善のために利活用する」場面を場合分けすると以下の2つに分けてアプローチしていくことが必要であると考え。

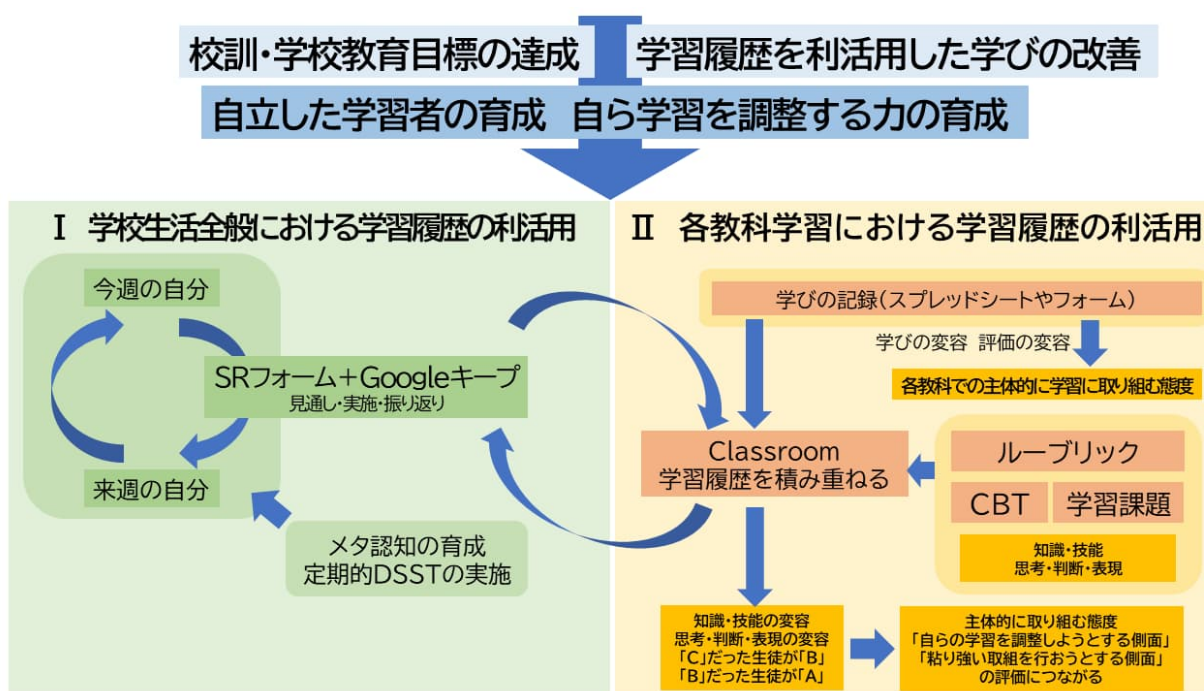
I 学校生活全般における学習履歴の利活用

II 各教科学習における学習履歴の利活用

これらは学校教育の歯車であり、互いに動くことでより効果的な学習履歴の利活用へとつながると考え、これら2つの方向性をもって研究を進めた。

1-3 実際の取り組み

研究の全体構造を図式化すると以下ようになる。



令和5年度学校研究全体図

生徒の「学習改善」においては、IとIIは、孤立した取組ではなく、本研究仮説を実現するための両輪であると考え。「II 各教科学習における学習履歴の利活用」を続けることで、自分自身の成長のために必要な具体的な方略を身に付け、その生徒の変容はSRフォームの「2-2. 明日から1週間、力を入れたいことを箇条書きしてみましよう。」の記述に現れると考える。また、IIの活動

の積み重ねが、「Ⅰ 学校生活全般における学習履歴の利活用」にもよい影響を与え、自分自身のすべきことを具体的に表現できるようになり、より自分自身に適したタスク管理を行うことにつながると考えられる。また反対にⅠの活動よりⅡの活動が活発化すると考えられる。2つの歯車が回ることで、生徒は自立した学習者として成長し、自らの学びを自らデザインすることができるようになる。

2 得られた成果・効果等

2-1 成果・効果

学校全体で行った研究であるため、成果・効果の詳細や各教科等の取り組みについては、本校ホームページにある各教科研究紀要として公表している。

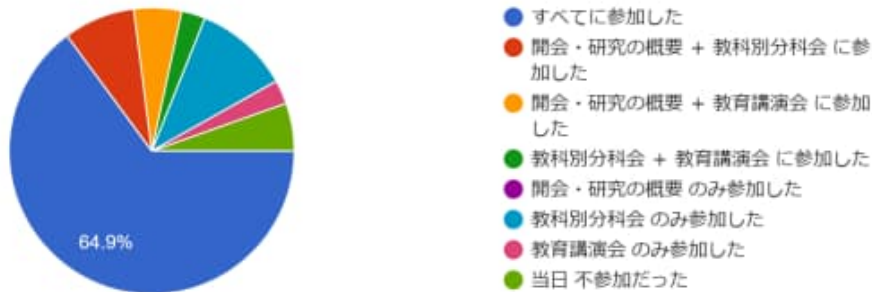
学校研究として得られた成果・効果等を整理すると以下のようなになる。

本研究において大きな成果は、「即時性」と「個別化」が挙げられる。C B Tやコンピュータを使った学習成果物は、生徒の返却が今まで以上に素早く適切に行うことができるため、学習のつながりを持たせられるとともに、生徒個々への適切なアドバイス・フィードバックが可能になった。また、そのフィードバック内容は、授業で使用した資料（Web 上の動画・P D F，教師の自作の資料）など、その生徒に応じたものを提供することができる。さらに相乗効果として、生徒が主体的に学習に向かう様子が見られ、令和の時代の学習者としての資質を身につけられると考えられる。

さらに、11月に本校の教育研究大会を開催し、研究の成果と課題を公表・普及することができた。

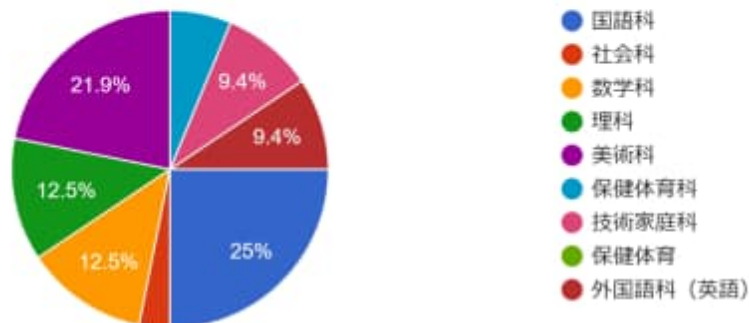
1. 当日参加したもの

当日参加したものをお選びください。9:00～9:30 開会・研究の概要（総論） 9:40～10:40 教科別分科会 11:50～12:00 教育講演会 ...初等中等教育局修学支援・教材課 課長 武藤 久慶 様
37件の回答



2. 教科別分科会

ご参加された教科別分科会を選択して下さい。
32件の回答



2-2 今後の課題

今後の課題として、現在考えられている点は以下のとおりである。

1人1台端末環境における指導と評価の実現を推し進めるにあたり、教師は日々の生活の中で指導改善を行っていくとともに、生徒が学習改善を自ら行うことができるようになるために「自ら学習を調整する力」の育成が必要である。しかし、「自ら学習を調整する力」を上げていくためには、学校の教育活動全体で育成することが大切である。その教育活動の中には、学級内での人間関係、清掃活動、生徒会活動、学校行事等といった教科教育とは違う場面も大きく関わってくる。そのため、SR フォームやDSST といった生徒の実態を捉えることができる活動を継続していく必要がある。一方、これらの活動は、実施する生徒やそれを見取る教師にとって大きな負担となってしまうと継続が困難になることが多い。学校生活の中で、当たり前に関わり合いを振り返る場面を教育課程に組み込むことも必要である。